

犬、猫の誤飲：傾向と対策【対策編】

アニコムホールディングス／島村麻子

前回は犬、猫の誤飲について、獣医師・飼い主に対して行った調査結果からみえる実態を【傾向編】として紹介した。今回は、前回紹介したデータを踏まえ、【対策編】と題して、犬、猫の誤飲を予防する対策のまとめにチャレンジしたいと思う。

犬、猫の誤飲を減らすためには、まず、敵である「誤飲事故」の発生機序を理解することが必要であろう。この発生機序における、ステップごとに対

策を考えてみたいと思う。

「誤飲事故」の発生機序

誤飲事故に至るまでには、以下の4ステップが考えられる(図1)。

1. 誤飲事故を起こさせる可能性のあるモノがある
2. 1.に関心を持つ
3. 2.を口にする
4. 3.を飲み込む

これらのステップのどれかを止める

ことができれば、誤飲事故は発生しない。それぞれのステップに対し、その対策案を検討していく(図2)。どの対策にも、一長一短があるが、その犬、猫の特性、家庭環境、ライフスタイルなどの全体を把握したうえで、それぞれの事情に合わせて、これらの対策を組み合わせるご活用いただきたい。

対策1 置かない

人間は、ありとあらゆるモノに囲まれて生活している。その生活圏に、犬や猫が足を踏み入れた瞬間から、誤飲事故発生の可能性が高まっていると言えるだろう。室内飼育の増加により、誤飲発生率が高まっている可能性がある。また、日本は「豊文化」の国であり、欧米的なライフスタイルと比較して、犬、猫の目線でみたときに手の届く範囲にあるモノが多いと思われる。小さな子供がいる家庭であればなおさらだろう。

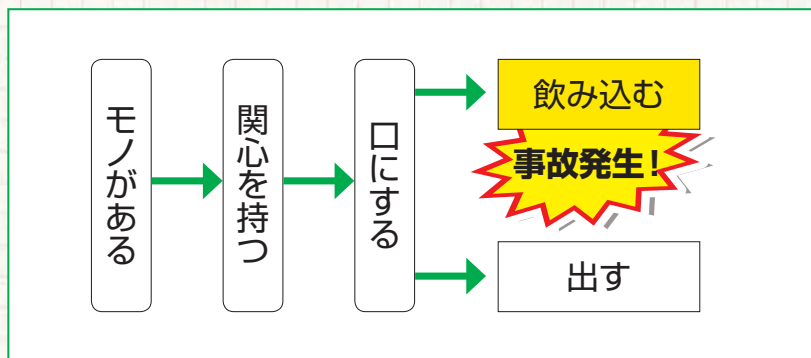


図1 「誤飲事故」の発生機序

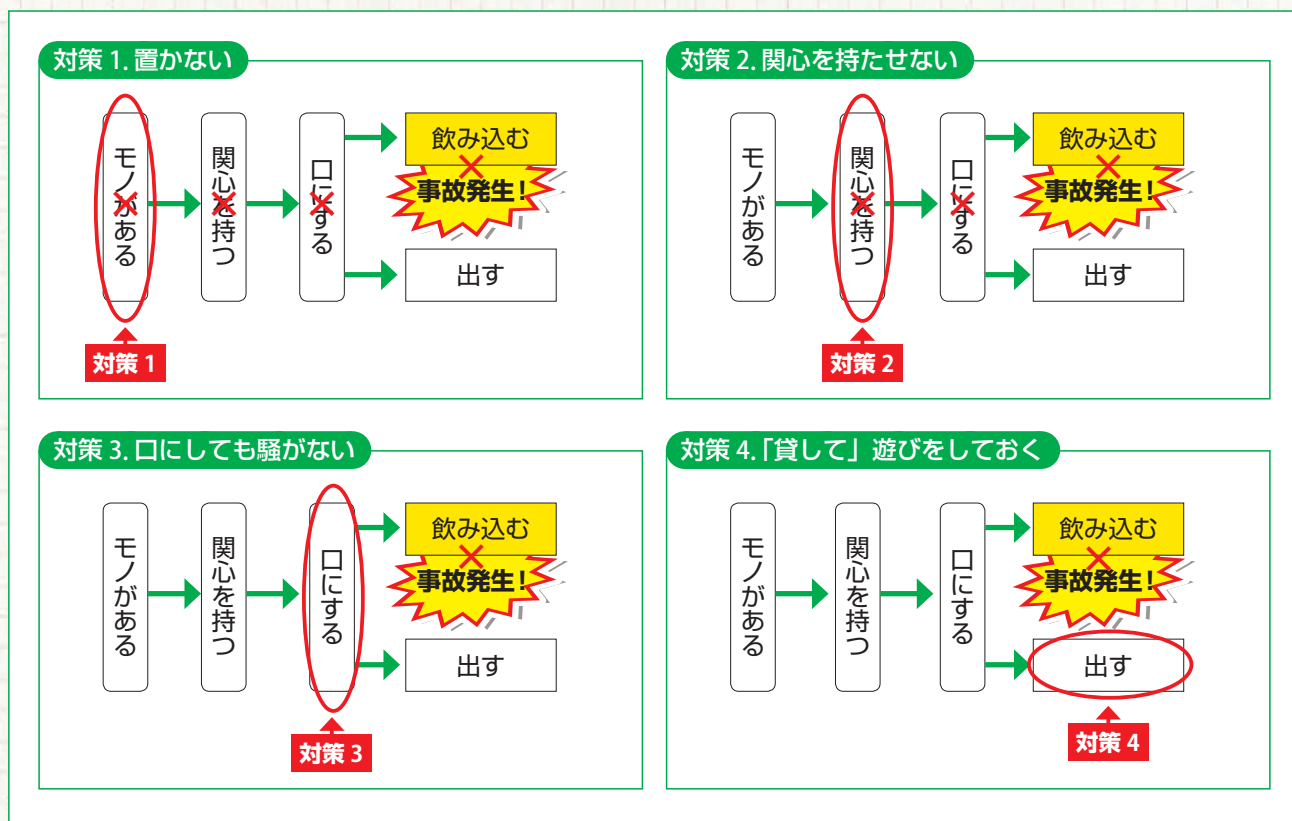


図2 犬の誤飲対策4カ条 「置かない」「関心を持たせない」「口にしても騒がない」「貸して」遊びをしておく

とは言え、家のなかに何も「置かない」わけにはいかない。そこで、とくに気を付けるべきモノを、A. 消化管障害、B. 中毒、C. 興味を引くものの3つの観点から検討していく。また、これらの観点から、それぞれの家庭や犬、猫の性質によって、個別に気を付けるべきものをさらに明確にしていたきたく、「家族みんなで、誤飲対策チェックリスト」（表1：飼い主向け資料①）と題したリストを制作したのでコピーなどでご活用いただきたい。

A. 消化管障害

消化管障害で怖いのは、3つある。

(1) 消化管穿孔、(2) 腸管閉塞、(3) 食道閉塞。いずれも、発見、処置が遅れば、命にかかわる。

(1) 消化管穿孔を起こすモノ

一言で言うと、「尖ったモノ」である。犬にとって食べられるものと認識されてしまう**竹串や鳥の骨**。竹串に肉をさしてそれを食べるというのは、人ならではの行為であり、犬はそれを認識せずに力強い顎で串ごと口にし、飲み込んでしまう。鳥などの骨は、胃で消化されることも間々あるので、摘出すべきか判断が難しいところではあるが、過去に鳥骨が腸管穿孔を起こした例も報告されており、慎重に判断したい（図3）。また、割れて尖る可能性のあるプラスチック製品も、注意が必要である。

(2) 腸管閉塞を起こすモノ

前号の【傾向編】でも述べたとおり、**ひも類**による死亡例は多く、172人中、15.7%に当たる27人の獣医師にその経験があった。ひも状異物となり得るモノとしては、ひも以外にも、**ストッキング、靴下、タオル**などといった多くの布製品があげられ、これらも7.6%の獣医師が死亡症例の経験を持っていた。室内生活を送るどうぶつにとっては、どれも身近なモノである。また、糸も、ひも状異物として腸管に大きなダメージを与え得る。裁縫用品としての糸以外にも、椅子やソファ、マットなどの布製家具からほつれ出た糸が、犬、猫の目線で見たときに興味を引く存在となる。これらを

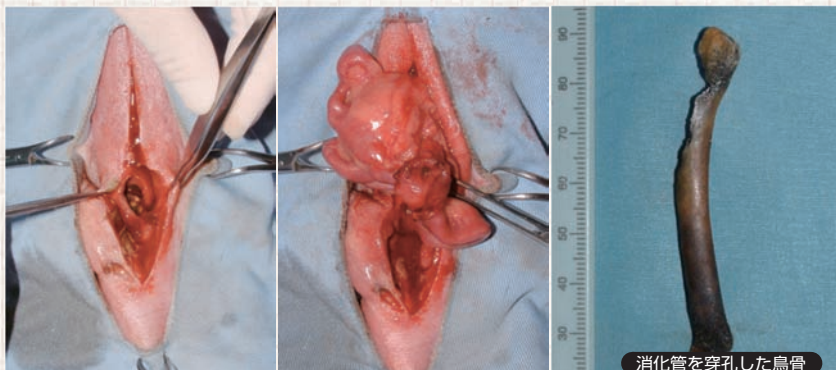


図3 鳥骨が腸管穿孔を起こし、包皮頭側より腸管内容物の排泄がみられた症例（ヨークシャー・テリア、雄、12歳齢）

写真提供：高橋雅弘先生（高橋ペットクリニック）

想定して、家のなかを常にチェックしておきたい。

また、腸管閉塞を起こす原因として、**石や果物などの種**の存在があげられる。便から多少出たことを確認できると安心してしまうことがあるが、これらは複数飲みこんでいる可能性もあるので注意が必要である。

石は、X線検査で検出可能だが、布類や果物などの種は写らないことを飼い主に周知し、超音波検査でモニタリングしていくことは重要であろう。ちなみに、バリウム検査は一般的ではあるが、万が一穿孔を起こしていたときのリスク、検査時間、どうぶつに対する負担を考えると、かならずしも積極的に選択すべき検査方法とは言えないかもしれない。

(3) 食道閉塞を起こすモノ

人で言えば、「お餅がのどにつかえた」というような誤飲事故に当たる。つまり、どうぶつにとって異物というよりも、口にし、飲みこむという行為が当たり前である、**果物や野菜（の種）、トウモロコシの芯、ジャーキー、ガム**などが原因となる。それらが、たまたま胃まで通過できずに食道に居残ってしまう大きさで飲みこまれてしまい、嘔吐などの消化器症状だけでなく、場合によっては、気管を圧迫して呼吸困難を引き起こすこともあり、事故性の高いケースと言える。

そこで、これらのモノを食べさせるときは、適正なサイズに注意し丸飲みさせない工夫が必要である。とくに、犬の飼育経験があまりない飼い主や子どもは、犬もヒトと同様に何度も「咀嚼して」から飲みこむと勘違いしてい

るために食べ物をカットしないで与えることもある。犬はあまり咀嚼しない動物である旨の説明も心がけたい。

また、口にした後に出そうと思っていたとしても、**スーパーボールや、丸い形状のおもちゃ**は、ツルツとしているため、思いがけず飲みこんでしまうというような事故が発生することもある。犬用おもちゃや、犬用ガムは、丸のみできる「小ささ」であることも多い。見た目はそれなりの大きさがあっても、柔らかいため小さくつぶれるようなおもちゃも要注意である。おもちゃやガムの選び方を注意すれば、それだけで誤飲事故を予防することができる（表2：飼い主向け資料②）。

高橋ペットクリニックの高橋雅弘院長は、内視鏡下食道内異物除去をした46症例を調査したところ、そのうち体重5kg以下の犬の症例が80.6%を占めたという。犬種で言うと、チワワが10例ともっとも多く、日本ではチワワとほぼ同数飼育されているミニチュア・ダックスフンドが3例、トイ・プードルが2例だったことを考えると、食道閉塞は超小型犬にとりわけ多く発生している可能性があり、とくに注意が必要である（平成23年度日本獣医師会獣医学術学会年次大会・北海道）。

また、食道閉塞は、思わぬ事故から起こるケースがほとんどである。そういった救急時への備えとして、飼い主には、日頃から、かかりつけ医の連絡先はもちろんのこと、夜間救急時の病院やペットタクシーの連絡先なども、家族みんなが見えるところに貼っておいて欲しいものである。また、窒息した場合、家での応急処置で一命を取

表1 家族みんなで、誤飲対策チェックリスト(わんちゃん編)

(飼い主向け資料①)

	質問	回答(該当する箇所に✓を入れて下さい)			
		はい	いいえ	要確認	確認日
1	椅子やソファ、マットなどの布製家具から、わんちゃんを目線で糸が出ていませんか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
2	口にすっぽり入ってしまうようなおもちゃはありませんか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
3	ひとり有的时候などにタオルや毛布などを繰り返し噛んでしまったことはありませんか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
4	散歩中に、地面を夢中でクンクンしていませんか？拾い食いのクセはありませんか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
5	葉やサプリメント、タバコは、わんちゃんの届かないところにはならずまっていますか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
6	ユリやシクラメンなど、わんちゃんに中毒を起こす可能性のある観葉植物などを置いていませんか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
7	十分な運動、遊びなどで、ストレス発散はできていますか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
8	食事からは、栄養だけでなく、満腹感も十分に得られているようですか？食後に食器をなめ続けていませんか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
9	何かをわんちゃんが口にしたときに、家族が騒ぎすぎないようにしていますか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
10	テーブルや棚の上にわんちゃんが届かないように、イスなどを片付ける習慣はできていますか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()
11	口にくわえたものは、声をかけると素直に返してくれますか？	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	()

お名前	
犬種	
年齢	
チェック日	

次回のチェック日	
月	日

り留めることができる。その方法についても、万が一に備えて獣医師から周知しておきたい(表3: 飼い主向け資料③)。

B. 中毒

あげればキリがないが、とくに事故の報告の多いモノは、以下の5種類である。生活するうえで必要があるからそこにあるわけで、これらを家のなかに「置かない」ことは難しいかと思うが、それぞれの管理を十分に行い、犬、猫の生活圏との住み分けにより、「置かない」工夫をしたい。また、中毒は、全身症状を呈し、命にかかわることもあるため、とにかくこれらを口にした時点での早めの来院を促したい。

(1) 人の医薬品／サプリメント／タバコ

人の新生児同様、どうぶつも飼い主が口にするものはすべて食べ物であると勘違いするケースがあり得る。PTP包装などで匂いがしないと思われる場合でも、どうぶつが口にするにはあるので、油断できない。犬、猫には絶対開けることのできない引き出しなどで、厳重に管理する必要がある。また、人に効果的と言われるサプリメントが、どうぶつでも効果があるとは言えないこと、逆に命にかかわるほどの害を及ぼす可能性があること(例: αリポ酸)も、飼い主には十分伝えていかなければならない。

(2) 犬に中毒を起こす食べ物

チョコレート(とくにバレンタインデーのある2月に注意)、ネギ類(ハンバーグ、餃子などにも含まれる。調理中のモノも含む)、発酵中のパン(近年の手作りパンブームで増加)など、飼い主は中毒を起こす可能性に関して知っていても、どうぶつが思わぬタイミングで口にしてしまうことがあり、より具体的な予防啓発が必要である。

(3) 観葉植物

ユリやシクラメン、ポインセチアなど、家のなかや玄関によくみかける観葉植物にも中毒物があることは、まだあまり知られておらず、啓発が必要である。

表2 オモチャやガムを選ぶときの原則

(飼い主向け資料②)

*例えつぶれても口にすっぽり入らない大きさ

*口にしているうちに、欠けたり、壊れたりして、丸飲みできるサイズになる可能性のないモノ

(そのためには、それなりの硬さが必要ということになるが、硬すぎると歯が欠けるなどの障害を引き起こす可能性もあるので注意！)

*ツルツルとしていないモノ(思いがけなく飲み込んでしまう事故に注意！)

*糸に興味を示す可能性のある子には、糸の出ないモノ

※ガムは丸飲みできる大きさになる前に捨てましょう！

※オモチャは与えたままにせず、かならず飼い主さんが片付けましょう！

(4) エチレングリコール

不凍液だけでなく、熱中症対策に使われることのある保冷剤も要注意だ。これらは甘い味がしてどうぶつが口にしやすいため、犬、猫の生活圏には、絶対に置かないようにしたい。

(5) 駆除剤／除草剤

ナメクジ駆除剤、殺鼠剤、肥料など、これらの厳重な保管はもちろんだが、使用する前にどうぶつの行動範囲を確認することも重要である。こうした薬剤がかかったモノを庭、玄関、ベランダ、散歩中などに口にしてしまう可能性もある。

C. 興味を引くモノ

犬、猫にとって興味を引くモノは、以下の3つの観点から注意する必要がある。

(1) 動きのあるモノ

前述の家具や衣類から出ている糸やひもは、どうぶつにとって興味の対象となる。とりわけ、運動や遊び時間の足りない犬、猫にとって、ストレス発散の対象ともなる。裁縫の糸や、釣り糸もその動きが興味の対象となり得る。こうした糸には、飼い主の匂いや、魚の匂いなどがついていて、さらに興味が増している可能性がある。また、口にした糸に針が付いていると消化管穿孔の危険度が増す。針はX線検査で写るので迅速な診断が可能ではあるが、飲み込んでいたとしても、いつもよりちょっと嘔吐が続く程度の症状で慢性経過をたどる場合もあり、来院が遅れるケースが散見されるため注意が必要である。

(2) うれしい匂い・味がするモノ

子どもがお菓子のついた手で触ったコインや、コンセントやアクセサリなど、どうぶつにはうれしい匂いや味になってしまったモノを口にしてしまうケースがある。また、革製品を好む、保湿ティッシュ(ショ糖が含まれている)が好きなど、そのどうぶつが好む匂いや味のするものは、犬、猫の生活圏に置かないようにしたい。ゴミ箱のなかも要注意だ。また、下着や靴下、イヤホンなど飼い主の匂いが付いているものに過剰に反応するどうぶつもいる。こうした行動を示すとき、場合によっては、分離不安症の症状であるケースもあり得るので、事故には至らなかつたヒヤリハットのときも含め、繰り返し発生する場合には、行動カウンセリングを勧めたほうが良いケースもあることに留意しておきたい。

(3) 飼い主が口にしているモノ

前述のとおり、タバコ、クスリ、サプリメントなどは、飼い主が普段口にしていることを犬、猫がみていて、食べても良いものと勘違いしてしまう可能性がある。食べてしまった場合には重篤な全身症状を引き起こすケースがあり得るので、保管は厳重に行いたい。

以上、「対策1. 置かない」として、家のなかでどんなものを置いてはいいかわからないのかについて考察した。家族全員でこれらの共通認識を持つことが、本対策の《初めの一步》となる。飼い主には、家のなかをチェックする際、ぜひ家族みんなと和気あいあいと行って欲しい。

本対策が有効なケースは、家のなか

表3 緊急時の対応

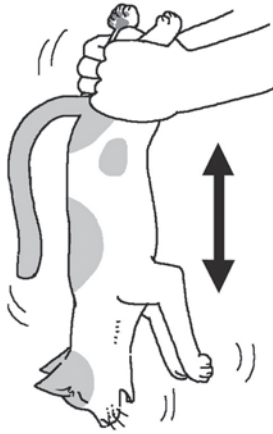
(飼い主向け資料③)

モノが喉につかえたら…

1. 慌てず、冷静に、まず深呼吸。口のなかに閉塞物がないか確認！

なければ、のど(気管や食道)が閉塞している可能性あり
 ひもなどは無理して引っばらず、そのまま病院へ

2. のどの閉塞物を出しましょう



猫・小型犬

ぶら下げて上下に数回揺する



中・大型犬

肋骨の下から腕を入れて矢印の方向に押し肺の空気を押し出す



意識がないとき

胸を矢印の方向に押し肺の空気を押し出す。吐いたものが再度詰まらないように注意

愛玩動物, 日本愛玩動物協会, 1月号, No.223, 2012

連絡先名	電話番号	営業時間
かかりつけ医		
夜間救急時の病院		
ペットタクシー		

に限られる。散歩中の拾い食いの癖を持つ犬については、次項以降のステップに対する対策が必要になる。

犬、猫の学習の仕組み

まず、「口にする」という行動の前と後の関係に注目したい。飼い主としては口に欲しくないモノを、犬、猫がなんらかの関心を持って「口にしたい」後に、犬、猫にとってうれしいこと、例えば、「かまってもらえる」、「飼い主に奪われない」といった好ましい状況が発生すると、さらにそのモノへの関心が高まり「口にする」という行為を行うようになる。つまり、あるモノを「口にする」という行動の結果、良いことがあると、学習したことになる。ここで、注目すべきは「口にしたい」ことが、飼い主にとっては、犬、猫の誤飲につながり得る「困った行動」であっても、どうぶつにとってはその後に良いことがある「楽しい行動」になってしまっているという結果につながっていることである。そこで、このどうぶつの学習の原理を理解し、対策2~4を提案したい。

対策2 関心を持たせない

(1) 欲求不満を解消する

元々好奇心や食欲の大きい犬であっても、いろいろなモノに関心を持ち、口に背景に「欲求不満」が隠れていることがある。犬は探索欲求を持っており、またほとんどの犬種は、狩猟や牧羊などの「仕事」を持つことで、人との暮らしを営んできた歴史がある。しかし現代、家庭犬として一緒に暮らす場合には、元々その犬種が備える能力や欲求、探す、くわえる・追いかける・走る・人とコミュニケーションをとる（命令に従う、も含める）などの欲求が満たされていない可能性がある。これに対しては、散歩、スポーツなどで、欲求不満を解消し、暇な時間をなくしたり、運動不足を補う必要がある。かじりたい、くわえたいという欲求に対しても、飲み込んでしまう可能性のないモノを与え、それに興味を持ったときにほめることをしていくと良い。

食事については、ドックフードで十分な栄養が摂れていても、「満腹感」

が十分に得られていない可能性もある。その場合は、カロリーの低い寒天をドックフードに混ぜてかさを増したり、皿で与えるのではなくハンドフィード（手から与える）にすることでコミュニケーションを取りながら食事時間を長くして満腹感を高める工夫も可能である。これらの欲求不満対策は、誤飲予防対策であるだけでなく、どうぶつと人が一緒に暮らすうえで、人がある程度負うべき責任とも言えるだろう。

(2) NGなモノに近寄らせないようにする

触れてほしくないモノ（NGなモノ）に関心を持ったとき・くわえたときなどに、大きな音などで驚かせることで、そのモノに近寄らないようになるかもしれない。ただし、その音を鳴らしたのが飼い主だと犬が認識してしまうと、構ってもらえたと勘違いしたり、飼い主に恐怖を感じトラウマになってしまったりする可能性があるため要注意である。犬に気づかれないように音を立てるか、NGなモノをくわえると大きな音になるようにしておく（缶のなかにコインなどをいれて、それをNGなモノにつなぐなどの対策が考えられる。また、音ではなく、NGなモノに嫌な味（かじり防止スプレーなど）を付けるという方法もある。適切に行えば対象物に近寄らなくなることもあるが、これは行動を遮断しているだけなので、動機があれば再び行動を繰り返すようになるだろう。

(3) 散歩中は飼い主を意識させる

散歩中拾い食いをする犬に対しては、食事分のドックフードを散歩を持って行き、

① 何もしなくても時々与える。

② 犬が飼い主をみたり、飼い主に注意を向けたりしたときに与える。

ようにすると、飼い主をみていたほうがおいしいものが現れるということを学習していくので、地面を嗅いだり、何かを探したりする頻度は減っていく。効果的に飼い主を意識させるために、なるべく犬が近くにいるようにリードの長さを調整しておくことも重要である。もちろん、そもそもあまり

地面にモノが落ちていない散歩コースに変更する必要もある。また、拾い食いをしそうなものに飼い主が先回りし、これを避けようとする行為は、犬にとっては落ちていたものを飼い主と奪い合うゲームとして認識され、拾い食いを強化してしまっている可能性もあるので注意が必要である。

対策3 口にしても騒がない

どうぶつが危険なモノを口にしたときにまず大事なのは、「騒がない」ことだ。

なぜなら、誤飲発生時に動物病院でよく聞かれる言葉として「危ないので取り返そうとしたら、（犬が）慌てて（もしくは、抵抗して）飲み込んだ」という言葉が数多くあげられているからだ（前回詳述）。海外経験の長い水越美奈先生（日本獣医生命科学大学）は、「アメリカ人はもっとおおらか。日本人のほうが真面目なのか、犬が何かをくわえているだけで反応することが多いので、より学習が強化されている可能性はあるかもしれない」と話す。確かに、口にただけで大騒ぎをされることで、それを口にすると構ってくれると学習している可能性は高い。学習能力が高いと言われている犬種の場合はなおさらである。

また、犬が口にしたいモノを奪おうとすることは、犬にとっては「奪い合い」というゲームとして認識されることもある。例えば、口に欲しくないタオルを犬がくわえた瞬間に、飼い主が反応すると、それだけでも犬は構ってもらえてうれしいわけだが、そのまま走って逃げたら飼い主が追いかけてきてくれて、ますますうれしい…というような状況は、ゲームとして成立する。「奪い合い」ゲームの最悪な点は、奪われないようにするために、犬が口にしたいモノを飲みこんでしまうことがあり得ることだ。したがって、口に欲しくないモノを犬が口にしたいときには、心を鬼にして犬の行動を無視することも必要だ。口に欲しくないモノの代わりに、毎回、別の興味を引くであろうおやつなどを差し出すことはお勧めしない。「NGなモノを口にするとおやつをくれる」と学習してしまうことがあるからである。冷静に観察したのち、危険なモノで1人遊びを

始めてしまうなど、どうしてもなんらかの対処が必要となったときの、最後の手段としておやつはとっておくべきである。日頃から、飼い主主導で、かじってもいいオモチャを用意し、そちらをかじり始めたらしっかり褒め、満足したところで（飽きる前に）片付ける、という習慣をつけておきたい。

対策4 「貸して」遊びをしておく

犬には、できることなら、「オフ(off)」や「貸して」の訓練を、遊びとして日頃からしておきたい。これらは、万が一のときに「命を守る」ことにつながる訓練とも言える。

「オフ」とは、くわえたものから口を離すことで、ご褒美がもらえるという遊びである(表4: 飼い主向け資料④)。この訓練に「リーブイット (leave it)」という合図を使うトレーナーもいる。遊びをとおして、口をつけるよりも口を離すほうが良いことを教えることで、前述したような危険なモノを食べてしまったときにも、すぐには飲みこまないでくれるため、事故を防ぐことができる。

犬には、モノを守ろうとする習性がある。おもちゃを取り上げられるたびにしまわれる経験をする、取り上げられることは、犬にとって大事なものを「奪われる」という感覚になる。そこで、飼い主としては「貸して」とか「見せて」という意識で練習することがポイントである。自分のものだと思っているモノを「貸すだけで、返してもらえる」、さらに「**貸すと良いことがある!**」と**犬が思ってくれたら、しめたものだ**。また、素直に「貸して」ができるようになるためには、最初は、犬が守りきれない(守れたという成功体験を持たない)、あるいは犬にとって守る価値が小さいものから練習を始める。つまり、犬がくわえた状態のままでも飼い主が握る余地のある、細長い棒状のガムといった**大きいサイズのものからはじめると良い**(表5: 飼い主向け資料⑤)。

誤飲に関連して 気を付けておきたいこと

以上、誤飲対策の4カ条について述べた。最後に2点、追記しておきたい。

表4 「オフ(off)」遊び

(飼い主向け資料④)

1	おやつを手で握り、おやつを握った手を握ったまま、犬の口の近くに持って行き、動かさないように維持する
2	犬は匂いを嗅いだり舐めたりするが、我慢してそのまま動かさずに維持し続ける
3	犬が自ら口(鼻)を離したら、「OK」と言って、握った手を開いて、おやつを与える
4	これを何度か繰り返す。時々、口の近くに持って行って即座に「OK」と言い、単に食べさせるだけの機会もつくる
5	握った手を口元に持って行くと、すぐに口(鼻)を離すようになったら、口元に持って行ったとき(口をつけそうになったとき)に「オフ(off)」というコマンドをつける。
6	「オフ(off)」と言って、そのまま手を維持し、口(鼻)を離したら、「おりこう」と言って、手を開いておやつを与えるか、あるいは違う手から別のおやつを与える
7	この時点でも、時々、「OK」と言ってすぐにおやつを与える機会もつくる
8	フードを手のひらに置き(握らずに)、口元に持って行き、「オフ(off)」と言う。犬が口を近づけてきたら、手を握る(絶対に取りられないように)。「オフ(off)」コマンドが成功したら→おやつを与える
9	おやつを床の上に置いた状態でも練習する。初めは手を近くに添えて、口が近づいてきたら手で覆って隠す(絶対に取りられないように)。「オフ(off)」コマンドが成功したら→おやつを与える
10	徐々に添えている手がなくてもできるようにしていく。

出典：水越美奈（日本獣医生命科学大学）

表5 「貸して」遊び

(飼い主向け資料⑤)

1	飼い主が手で握ったままでも犬がかじれるようなものを用意
2	握ったままの状態「OK」の合図を出し、かじらせる
3	かじっている途中で「貸して」などと言いながら犬の口から離していき、成功したら褒めてからおいしいおやつをひとかけら与える
4	2、3秒待ってから「OK」と言って再びかじらせる
5	手で握ったままの状態から、徐々に手で持たない状態に移行する
6	借りる時間を変化させていく

<注意>しつこく練習すると、かえって守るようになることもある。1回5分以内で1日3回程度に。

出典：水越美奈（日本獣医生命科学大学）

1. 病気との関連をチェック

A) 食欲が増える病気

- 飲水・尿の量が増える：内分泌疾患（クッシング症候群、甲状腺機能亢進症、糖尿病）
- 下痢をしている：脾外分泌不全、炎症性腸炎、消化管内寄生虫症、リンパ管拡張症

B) 食欲が増える薬：ステロイド、抗ヒスタミン薬、抗けいれん薬など

C) 不適切なダイエット

夜間病院、二次診療施設も含め、複数の動物病院に通院しているケースでは、ときにこれらの要因を見逃しやすいので注意が必要である。筆者は、誤飲を繰り返す犬の飼い主宅に訪問し、そこで始めて4つの病院に通っていることを知ったという経験がある。それぞれの病院に通院している理由などの情報を統合するとクッシング症候群が疑われ、のちにそのように診断された。

2. 行動問題のカウンセリングの必要性をチェック

飼い主が「わが家にはもう片付けるものはありません」と話すようなケースも稀にある。また、砂や、芝などをずっと食べ続けているようなケースは、常同障害の一種、異嗜症（Pica）の症状であるかもしれない。これらの背景には不安や刺激の欠乏、ストレスなどが考えられているが、再発を繰り返す場合は、専門家に相談したほうが良いだろう。

また、飼い主と一緒にいるときには問題がないにもかかわらず、留守番中に不安が強くなり、問題となる行動を起こすといった「分離不安症」の可能性もある。早期離乳や、飼い主との愛着の過剰、突然の環境変化などがリスク要因になり得るが、この場合にもやはり専門家に相談したほうが良いケースもある。**心当たりがあるときは、飼い主に、ホームドクターから獣医行動学の専門家を紹介することも必要かもしれない**（参考：獣医動物行動研究会 <http://vbm.jp/index.htm>）。

社会一丸となって「あんしん創造」

誤飲を起こした場合、飲みこんだモノが、食道につかえることなく胃に留まり、小腸に移行しない間に、飼い主が来院し、迅速に診断することができれば、最悪の事態は避けられる。内視鏡は、麻酔が必要ではあるが、①X線検査やバリウム検査などに比べて、誤飲物の検出が容易、②手術に比べ、体への負担が軽く入院がほぼ必要ない。とくに手術リスクの高い食道内異物で有用なことから、非常に有効な装置と言えるだろう。また、飲みこんだモノが、(中)毒物であった場合も、早めの処置を行うことができれば、最悪の事態は避けられる。稀ではあろうが、人工透析を行えば助かる可能性のある症例もあるだろう。

しかし、全国すべての動物病院が、内視鏡装置も、人工透析装置も設置し、それらのメンテナンスを行っていかれるかと言うと、それは現実的な話ではないだろう。設置には費用も手間もかかり、機器を使いこなすための技術を習得する必要もある。そこでこれらの装置は個別に持たずに地域で所有する、もしくは、病院間で信頼関係を構築し症例を紹介しあうことができれば、飼い主にとって安心などうぶつ医療体制を効率的に実現することにつながるはずだ。

また、何かあったときには早期に来院するよう促すことや、事故対策・リスク管理についての啓発活動をどうぶつ医療業界全体で行うことが、社会的なムーブメントを起こすきっかけにもなり得る。誤飲への注意喚起を促すことで、ヒヤリハットを含めた事故関連データの集積も可能となり、それをフィードバックすることでより効果的かつ具体的な対策を立案する助けにもなるだろう。

例えば、アメリカにおける航空機事故の調査から安全工学が発展した結果、ヒューマンエラーなどの個人的な資質の問題点よりも、安全教育や装置やシステム、操作方法などの見地からヒューマンエラーを回避するための調査・改善に重点が置かれるようになったという。犬、猫の誤飲事故に関

しても、飼い主への啓発と合わせて、人的エラーを起こし得ないような犬、猫用オモチャやガムが設計されるようになっていけばとも思う。いずれにせよ、どうぶつ医療界、関連業界が一丸となることで、社会の涙を少しでも減らすことができ、少しでも人とどうぶつ心の安心を創造できたらと心から願う。

謝辞

執筆にあたり、水越美奈先生（日本獣医生命科学大学）はじめ、多くの先生方にアドバイスおよびヒントをいただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。